

「明日（アシタ）の空の向こうに」☆☆☆☆

2013（平成25）年1月31日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本・編集：ドロタ・ケンジェジャフスカ
ベチャ／オレグ・リュバ
ヴァーシャ（ベチャの兄）／エウゲヌィ・リュバ
リャバ（ヴァーシャの友だち）／アフメド・サルダロフ
警察官／スタニスワフ・ソイカ
老人／ズィグムント・ゴロドヴィエンコ
花嫁／アレクサンドラ・ピッレヴィチ
受付嬢／キンガ・ヴァレンキエヴィチ
運転手／スタニスワフ・ザヴァツキ
国境警備隊／アントニ・ワンチュコフスキ
パンを持った少女／アンゲリカ・コジェ

2010年・ポーランド、日本合作映画・118分

配給／パイオニア映画シネマデスク

<この撮影！この表情！>

本作は駅の構内らしきところを、6歳くらいのかわいい男の子ベチャ（オレグ・リュバ）とその兄ヴァーシャ（エウゲヌィ・リュバ）が走り回るシーンから始まる。そんなシークエンスからすぐに「浮浪児」とわかる2人が疲れ果てて眠ろうとするのは構内のベンチの上下だが、彼らは一体何を食べ、どのように生きているのだろうか？それでも、2人はあくまで楽しそうにじゃれつき、ケンカし、挙げ句の果ては客が捨てたタバコをベチャが一人占めして吸っていることにヴァーシャが真剣に文句をつけているから楽しそう。冒頭にいきなり登場するこんな風景はかなり奇妙だが、2人のじゃれつくさまが何ともかわいく、いとおしくなってくる。

いつの間にか眠りについたベンチの上のヴァーシャをそっと起こしにきたのが、ヴァーシャとほぼ同じ年齢ながら背の高い少年リャバ（アフメド・サルダロフ）。リャバは「この地図を覚えておけ」とヴァーシャに伝えた後それを焼いてしまったが、さてこの地図は何を意味しているの？クローズアップを多用したこれらのシーンの撮影は2人のあどけない子供たちの表情をいきいきととらえており、見どころがある。もっとも、チラシの写真でもそうだが、ベチャの上の前歯がほとんどないのが私には少し気がかり・・・。

<3人はどこへ？>

その後、ヴァーシャは一気にベンチを離れ、リャバと共に構内から飛び出していたが、ベンチの上で展開されたそんな2人のやりとりを下から薄目を開けて見ていたのがベチャ。ベチャは2人が飛び出していくとすぐにその後を追いかけていったが、2人が向かったのはある列車。まだ暗い中、ヴァーシャとリャバの2人は警備の目を盗みながら、その列車の中に乗り込もうとしたが、2人の後を追ってきたベチャは大きな声で「ヴァーシャ」と呼んでいたのを制されて、今は2人と同じ列車の中に。ポーランドの女性監督ドロタ・ケンジェジャフスカを私は全然知らなかったが、同監督はここまで何の説明も加えず、3人の表情と行動だけでストーリーを展開していく。

そこからわかるのは、ヴァーシャとリャバはまだ小さいベチャを駅構内に置いたまま2人だけでどこかに行くため列車に乗ろうと計画していたのに、ベチャがついてきたため、仕方なく3人旅になったらしいこと。これは一方では迷惑なことだが、他方では・・・？それはともかく、この2人、いや3人の子供たちは今どこからどこへ行こうとしているの？また、それは何のため？本作は子供映画の最高傑作である『禁じられた遊び』（52年）が描かれた第二次世界大戦の時代ではなく現代だが、それが日本人の私にわかるのは後半に入り携帯電話を使っているシーンが登場してからだ。もっとも、チラシを読めば3人の子供たちはポーランドと国境を接する旧ソ連（ロシア）の貧しい村から国境を越えるべく冒険の旅に出たことがわかるが、それは一体何のため？「政治亡命」でないことは確かで、それはどうも「外国に行けばきっともっといい暮らしができるはず」という夢と希望だけらしい。なるほど、本作の邦題『明日の空の向こうに』とはそういう意味だったのか・・・。

<子供たちの演技力、そして計画力と実行力に脱帽>

子供映画では子供たちの演技力が生命線だが、それにも「演技達者派」と「ナチュラル演技派」の2種類がある。今はハリウッドを代表する女優となったダコタ・フニングやドリュー・バリモアなどは小さい時から「子役スター」として大人顔負けの演技を披露していたが、本作の子供たち、とりわけベチャを演ずるオレグ・リュバはあくまでナチュラル演技派。ヴァーシャとリャバの2人が目指した冒険の旅は「国境越え」を含む多くの危険が待ち受けているから幼いベチャが足手まといになることは明かだが、現実には現実。さてそこで3人の子供たちはどんな団結力を？

そんな目で見える前半の見どころの一つは、国境近くの街で示される生きるための工夫。『人間の条件』（59～61年）（『シネマルーム8』313頁）の第5部、第6部では仲代達矢演ずる梶上等兵が乞食の格好で1個の饅頭に手を出そうとするとたたき出されたが、ベチャが「おばちゃんキレイだね」と女心と母性本能の両方を巧みにくすぐると、朝市でパンを売っているおばさんは・・・？他方、長い旅に飲み水が不可欠と考えたヴァーシャとリャバの2人は、巧みな手段で飲料水の確保を。もっとすごいのは、国境越え地帯には鉄条網があり、そこには高圧電流が流れているだろうと想定したリャバの指揮の下にその訓練をしていること。ロープを張り、その下を這ってくぐれと命令されたわけだが、さて幼いベチャはその命令に素直に従うの？

<2つのエピソードでも、子供たちがイキイキと>

本作は近時の邦画のように全く説明調にならないので少しわかりにくい点もあるが、中盤には面白いエピソードが2つ登場するのでそれに注目！第1は、リャバの知り合いの老人との交流。この老人は街外れで炭焼きをやって生活しているようだが、一人ぼっちの生活にさびしそう。そこで温かい食料と一夜の宿を子供たちに与えた老人は、幼いベチャに対しては国境越えは難しいから、ここで一緒に暮らさないかと提案。さて、それに対するベチャの選択は？ベチャだって自分が年長者2人の足手まといになっていることはわかっているはずだし、ここで老人と2人で暮らせば少なくとも家と食料と安全は確保できそうだ。しかし、それが大事？それとも、やっぱり兄と一緒にいることが大事？

第2は道を歩いている時の結婚式の一团との遭遇。ヴァーシャとリャバの悪知恵（？）は先の道にロープを張って一团の進行を遮り、そこで「僕たちにも幸せのおすそわけを！」と申し向けながら一团に割り込むこと。かわいい子供たちのそんな妨害（？）を喜んだ大人たちは、進行をストップさせて食事や酒を子供たちにふるまったから、3人の作戦はまんまと大当たりだ。そのうえ、一人花嫁の車の窓から「花嫁さんキレイだね」と語りかけるベチャのかわいらしさとその言葉に花嫁はたちまちイチコロ。ウエディングドレスをたくし上げて足にしばりつけていた財布から硬貨を取り出してベチャにはずんでくれたから、ベチャは「キレイな足だね」との誉め言葉を忘れることなく大喜び。もっとも、大人たちに混じって酒を大量に飲んでいたヴァーシャとリャバが、その後二日酔いに苦しんだのは自業自得？

<高圧電流の鉄条網越えのスリルをタップリと！>

本作後半のクライマックスは深夜、月の明かりだけを頼りに、3人で決行する「国境越え作戦」。スティーブ・マックイーンらが出演した『大脱走』（63年）では捕虜たちが地下トンネルを掘ることによって大脱走を実現させたが、本作でヴァーシャとリャバの2人が使う、国境越え大脱走のための武器は、高圧電流の鉄条網の下を掘って人間が通れるだけのすき間をつくり出すための空き缶。警備隊の目をくぐり、物音に気をつけ、自分たちの身体をロープでつなぎ合いながらこの「国境越え作戦」は、あの『大脱走』に勝るとも劣らないスリルがあるから、そのスリルをタップリと。

<警察署での悲しいストーリーは？>

ラストに向けてのストーリーは、ポーランドへの国境越えを果たした後、太っちょの警察官（スタニスワフ・ソイカ）と豊満で色気ムンムンの受付嬢（キンガ・ヴァレンキエヴィチ）が駐在する警察署に3人が保護を求めたところから始まる。いくらしっかりしているとはいえ、10歳程度の少年ヴァーシャとリャバに「国境越え」の意味がすべてわかるはずはない。とりわけ、幼いベチャは何もわかっていないのだから、ただ優しくなさなおじさんをお願いするだけだ。当初「直ちに送還」と考えていた（であろう）警察官が悩み始めたのは、3人の子供たち、とりわけベチャが格別にかわいかったからだが、一介の警察官に裁量の余地などあるはずはない。本部へ問い合わせをしても結果はやはりダメ。せめてできることは、ひどい臭いのする3人にシャワーを使わせてやること。そんな苦渋の決断をした警察官は受付嬢に命じて3人をシャワー室に連れていかせたが、そこで見せるヴァーシャとリャバの才覚とは？

もっとも、いくら知恵を働かせても子供たちの浅知恵だけでは国境越えを合法化することなどできないから、本作にはそれ相応の悲しい結末が待っている。しかし、そこで効いてくるのが、本作の邦題だ。ベチャの目には「お空はどこも同じだね」と映ったかもしれないが、国境越えを果たし、自由に水浴びをしている時のヴァーシャには「これからは僕たちの空だ」と見えたらしい。深刻な大気汚染に苦しむ現在の北京の空とは全く異なる、東欧の美しく広大な空も本作の大きな見どころだから、邦題とともにその美しさをじっくりと味わいたい。

<「パンを持った少女」をどう解釈？>

四方を海に囲まれた日本人には、厳重に警備された陸路の「国境線」を越えての「国境越え」という観念が乏しいが、陸上の国境でたくさんの国に分かれているヨーロッパでは「国境越え」という観念が子供でも定着している（？）らしい。したがって、たどたどしいポーランド語しかしゃべれない汚らしい3人の子供たちに対する、ポーランドの田舎町の子供たち（ガキ大将たち？）の対応は冷たかった。こんな姿を見れば「世界の子供たちはみんな仲良し」などというキレイ事が通用しないことは明かだが、1人だけ例外があった。それは、ガキ大将たちの側に立つベチャと同じくらいの年頃の女の子が、ベチャとずっと目と目を見つめ合わせているうちに、自分の食べているパンをベチャに差し出そうとしたこと。これはきっと黙っていても見つめるだけで互いの気持が通じ合ったためだが、それは一体何故？

そんな女の子の様子を知ったワンパク坊主は女の子の手をピシヤリとたたいてパンをたたき落としたりから、女の子の目にはたちまち涙が・・・その後、ベチャたち3人はこの悪ガキたちから追いつてられるように警察署に向かうことに。しかし、前述した警察署での悲しいストーリーに至るわけだが、そこでドロタ・ケンジェジャフスカ監督は再びこの「パンを持った少女」を警察署の中に登場させるが、さてその意味は？ストーリーの展開には直接関係しないこの「パンを持った少女」の再登場をどう解釈すればいいの？ひょっとして、この女の子は先に旧ソ連からポーランドへ「国境越え」して入ってきていたの？そんなことをいろいろ考えながら、あらためて島国ニッポンの「閉鎖性」と「安全性」に感謝・・・？